

# 留学生の日本理解に資する授業構築の試み

——日本近代文学作品の翻訳を取り上げて——

徳 永 光 展

## 1. 問題の所在

ビジネス・シーンで日本人と交渉するにはN1の「日本語力+ $\alpha$ 」が求められるのが現実である〔注1〕。では、日本語力以外の要素（ここでは $\alpha$ と呼ぶことにする）は、一体どうやって身に付けさせるか。「 $\alpha$ 」の中身には、①普遍的な人格に関する要素、②ハイテク技術（理工系専攻者）、③日本在住により培った日本人との交渉術、コミュニケーション能力、換言すれば日本事情的知識〔注2〕などが考えられる。本稿では、このうち③を問題とし、留学生の日本理解に資する授業を日本近代文学作品の翻訳を取り上げることで実践し論文化させた模様につき、報告しようとするものである。

## 2. 前提としてのN1到達

非漢字圏学習者にとっては漢字習得が難関であるが、かといって中国、台湾、香港など漢字圏学習者にもそれぞれ相應の悩みは存在する。漢字習得のため国語教育に膨大な時間が必要となってくるし、日中間で異なる意味を持つ単語も数多く存在するからである〔注3〕。

一方、もともとは漢字文化圏に属していたが、漢字使用を制限または全廃した国、韓国、北朝鮮、ベトナムなどでは、漢字を知っていた世代とそうではない世代との間に大きな文化の断絶が発生していると言われる。

日本語による論文執筆を想定した場合、N1以上の力量が必要となってくる〔注4〕。ここでは、漢字圏に属する中国と今では非漢字圏になっているベトナムの学生に対する授業実践を取り上げる。

## 3. 文系留学生の論文テーマ

日本と自国の比較研究に関する論文、または自国の事象を日本語で説明した論文がほとんどを占めている。フィールド・ワークを取り込んだ修士論文も見られるが、それらも自国へ帰国の上で、自国の現象を対象としており、そこで得られた結果を日本語論文としてまとめるケースが多いのである〔注5〕。

日本人研究者は留学生の出身国における一次資料を探し当てたり、現地語論文を書かれた文脈や雰囲気まで取り込んで読みこなすことはできない。よって、留学生の論文は日本の地域研究に貢献することになる。翻って、海外に留学する日本人学生の論文テーマも日本研究か日本と留学先の比較研究に偏在する傾向にあるといってもさほど支障はないと見られる。つまり、留学生の執筆する論文とは、留学国と自国の比較研究か、または自国の事象を扱った研究にな

るという傾向は知っておくべきなのである。その際、指導者は一般的に留学生の出身国の事情に疎いので、彼らの語学力を信じた上で、それを日本に紹介するには、どのような手続きが必要かという点についての適切な指導が求められるのである。

#### 4. 「日本事情」教育の局面

留学生教育科目として、「日本語」と共にセットとして考えられるのが「日本事情」という科目である。これは、留学生の日本理解に資する授業として構想されるべきものであるが、日本に関するあらゆる局面が考察の対象となるものであり、授業担当者をしばしば悩ませる種となる。一体、何を教えるべきなのか、その対象があまりにも広すぎるからである。

日本で生活に必要な最低限の知識・教養というものはやはり存在する。日本人とのコミュニケーションに齟齬を来たす事柄があるのであれば、やはり体系化して、留学生に教えておいた方が親切なはずである〔注6〕。

留学生の立場から日本事情教育を眺めた場合、キャリア教育の一環として位置付けることが可能である。なぜならば、彼らの少なからぬグループにおける目標は日本企業に入社したり、自国の日系企業に就職したりするところにあるからである。

このような事情を授業者は念頭においた上で、日本事情と相手国事情の相互理解を目指すよう心がけるべきであると考えられる。このことは、日本語教育能力検定試験が「日本語学」の試験から日本語教育総合科学を試す試験へと変化し、「語学」一辺倒の試験から脱却している事実からも見て取れるのである。なぜ、そのような変貌を遂げたのかを想像するに、日本語を教え込むという押し付け教育が成立しない現場への対応が求められ、相手国の文化に未知な教師が留学生にどう接するかという視点への変容が現場で強く求められていると考えられるのである〔注7〕。例として、現行における日本語教育能力検定試験の出題範囲を以下に記す。

- 1 社会・文化・地域
  - 1 世界と日本
  - 2 異文化接触
  - 3 日本語教育の歴史と現状
  - 4 日本語教員の資質・能力
- 2 言語と社会
  - 1 言語と社会の関係
  - 2 言語使用と社会
  - 3 異文化コミュニケーションと社会
- 3 言語と心理
  - 1 言語理解の過程
  - 2 言語習得・発達
    - 3 異文化理解と心理
- 4 言語と教育
  - 1 言語教育法・実技（実習）
  - 2 異文化間教育・コミュニケーション教育

- 3 言語教育と情報
- 5 言語一般
  - 1 言語の構造一般
  - 2 日本語の構造
  - 3 コミュニケーション能力

この項目を分析するに、指導者が学習者の心に入り込み、彼らに教育を施すというよりは学習を支援するという立場に立つことが強く要求されていることが分かるのである。

この姿勢は、健全であると言ってよい。なぜなら、日本在住留学生は、学業を修了すれば帰国、第三国、日本での活躍を問わず、日本で学んだ知識・経験を使って日本語教育、通訳、翻訳などの分野で活躍するのであり、日本と世界の架け橋となる有為の人材なのである。よって、受け入れ側には相手の人格を尊重する姿勢の保持が求められるのは必然的なものである。

## 5. 留学生に配慮する授業の構築

福岡工業大学大学院社会環境学研究科修士課程には1年生向けの科目として「日本語コミュニケーション・スキル」特論が設定されている。この授業は、入学者の多くが中国を中心とする留学生によって占められているため、日本語能力の育成・増強を狙って設定された科目である。留学生は必修で、日本人学生は選択という扱いになっているものである。

筆者は2006年に研究科が発足して以来、この科目を担当し、授業の模索を重ねてきた。大学院生はN1に合格している者とそうではない者とで構成されていたが、N1合格者には論文執筆に必要なさらに高度の日本語表現を、非合格者には合格対策が必要であるように思われたが、両者を兼ね備えた授業を構築するのは、極めて難しいように見えた。能力差も著しく、またN1合格対策となると、特別な訓練を要する事実にも十分に気づいていたからである。

両者を止揚する形の授業としてまず取り組んだのは、各学生の研究テーマに関する論文内容を発表させる授業であった。これは学生の作文産出能力向上とプレゼンテーション能力向上を目指すことを目標とした。

各参加者が持ち回りで、修士論文研究の内容を発表するのである。しかしながら、すぐに2つの問題があることが判明した。まず、修士課程に入学したばかりの1年生は研究テーマをはっきりさせることができない者が圧倒的に多く、何を書けばよいのかが分からないという悩みが寄せられたのである。これは、従来は専門の教師が担ってきた部分である。日本語教師としての限界とそこに踏み込んでよいのかという疑問があるのも当然のことである〔注8〕。

続いて、日本語能力がばらばらの学生たちにN1合格対策授業をするのも非現実的であった。この試験に合格している学生にとっては意味のない授業になってしまうことも恐れた。

そこで、どのような授業を展開すべきか、再考する必要性に迫られたのである。私の専門分野は日本近代文学研究で、狭い意味では夏目漱石の文学研究を行ってきた。これまでは、留学生支援という大義の下、彼らの専門やニーズに寄り添うことを考えてきたが、学生の専門が修士1年生の段階では不確定の要素が強く、また日本語能力にも随分差があるのが実態であった。そこで、教師が授業内容を自らの専門分野を活かす形に再構成することにしたのである。

具体的には、日本近代文学作品の外国語訳研究と題した授業を行うことにした。各学習者に

それぞれの母語の訳と原文を持たせ、その比較・対照研究を行い、結果を日本語で説明させる授業を実行してみることにしたのである〔注9〕。日本語能力の増進に資する授業を想定した場合、日本文学の作品を原文と留学生の母語訳を対照させながら読むという試みは、比較日本語文化論への発展も期待でき、効果が認められると考えられた。

## 6. 指導の実績

まず、本務校の福岡工業大学大学院社会環境学研究所修士課程では、「日本語コミュニケーション・スキル特論」（1年生前期2単位）、「日本文化特論」（1年生後期2単位）にて、これまで、夏目漱石『心』〔注10〕、『夢十夜』〔注11〕、『坊っちゃん』〔注12〕、『それから』〔注13〕を取り上げてきた。受講者は中国出身者を中心に韓国、台湾、日本の学生が加わった場合もあったが、日本人学生には英訳〔注14〕、外国人学生には、韓国語訳〔注15〕、中国語訳（簡体字〔注16〕、繁体字〔注17〕）など、彼らの母語に訳されたテキストを持たせ、言語文化比較研究を指向する授業を模索してきた。

また、客員教授として2013年より集中講義を行っているハノイ大学大学院日本語学専攻修士課程「日本文学史論」（1年生3単位、集中講義）でもベトナム語訳〔注18〕と日本語原文を学生に持たせ、ベトナム語訳に観察される問題点について、学生に報告させる授業を模索した〔注19〕。

## 7. 指導の実際

議論の対象になると考えられる翻訳は次々と発見されてきた。結果的に、活字になった著作物に書かれてある事項はすべて正しいという神話が崩壊する現場に学生を連れて行ったことになる。なぜそのような翻訳がなされてしまったのかを問えば、翻訳発表当時の当該国における日本研究・日本語教育の整備状況や水準が見えるばかりではなく、学生を当地の日本語教育史に目を向けさせることにもつながっていった〔注20〕。

授業の方針は、参加者の気づきを共通言語である日本語ですべて説明させる点にあった。ここでは、言語現象の微細な箇所までがすべて議論の対象となる。例えば、苦心の跡が垣間見える翻訳や訳されずに日本語がローマ字または漢字表記で本文中に残っている例なども問題点として挙げられた。また、省略や曲解が疑われる箇所なども問題となった。

その一方で、授業者は、文学作品を授業で取り上げる意味についての再考を迫られたと言ってもよい。文学作品は、作家が長い時間をかけて練り上げた言語表現の集大成なので、そこで使用されている語彙・文法に習熟することは、言語習得への一里塚である。また、文学世界に取り上げられた事情が日本的な、エキゾチックなもので満ち溢れているならば、それは日本を理解する材料の宝庫でもあるため、翻訳上、多くの困難に直面することが予想される。同時に、今日的で普遍的な問題が文学作品で扱われているならば、同じ現象が母国だけでなく日本でも観察されるという親近感を翻訳に接する読者は感じると考えられる。

翻訳は翻訳者による作品解釈の産物である〔注21〕。日本人読者には想像もつかなかった新たな解釈が生じる可能性は十分にあり、日本文学研究のグローバル化の現場を見ることにもつながるのである〔注22〕。

## 8. 中国人学生の気づき

ここでは、夏目漱石『心』の林少華訳を取り上げて、修士論文作成に挑んだ学生（N2取得）による指摘につき、概観してみたい。林少華は『心』を2000年に訳出出版〔注23〕した後、2012年に改訳出版している〔注24〕。当該学生は、2000年に出版された最初の版のものを考察対象に選んだ。日本語原文、林少華の翻訳文、解説の順に、いくつか例を掲げてみよう。

【原文】「ある時は、海の中が銭湯のように黒い頭でごちやへしてゐる事もあつた。（1章／上1）

【訳文】有时候海面犹如一个大澡堂，蠕动着—层黑压压的脑袋。

【解説】ここでは「ごちやへ」という多くのものが秩序なく入り乱れているさまを「蠕動」という単語で言い表されるかどうかが問題となった。

【原文】「海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ這入る度に其茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしてゐた。」（1章／上1）

【訳文】我没有泳衣，但也怕东西被人偷走，每次下水之前都在小茶棚里脱个精光。

【解説】「脱个精光」というと、何も着ておらず、穿いてもいない。パンツもふんどしも身に着けていないという意味になる。衣服のみを脱ぐという意味で訳した方が適切ではないかという指摘があった。

【原文】「其上先生の態度は寧ろ非社交的であつた。」（3章／上3）

【訳文】莫如说先生的态度有些天马行空的味道。

【解説】「天马行空」とは、思想が豊富で考えや行動が何物にもとらわれず、自由であり、先天的にこういう性格を持っている人間のことを指すので、先生の暗い性格、交際嫌いな様子を示すのに適切かという指摘があった。

【原文】「さうして其所で美しい—対の男女を見た。」（12章／上12）

【訳文】在那里见到—对美丽的男女。

【解説】「美しい」の訳語が「美丽」であることは明らかであるが、女性にしか使えないのではないかという指摘があった。

【原文】「先生の覚悟は生きた覚悟らしかつた。」（15章／上15）

【訳文】先生的信念似乎是活的信念。

【解説】「生きた」の訳が「活的」となっているが、中国では「生きた魚」、「あの作家はまだ生きてははずだ」といったように、世の中に存在しているものにしか使わないという指摘があった。

以上は、学生による気づきの一端を示したものである〔注25〕。

## 9. 中国人学生論文の指導者による添削

N1でも論文執筆は困難であると言われる。では、N2の中国人学生がどの程度書けるのかという点につき、例示してみたい。ここでは、先ほどの学生と他の学生から1例ずつ列挙してみることにする。まずは、『心』の中国語訳研究に挑んだ学生によるものである〔注26〕。

### 【添削前】

語義の解釈: 語義の解釈における、林少華は割合に抽象的、生き生きとしている言葉を使って、それによって、読者の読む気分を出されるという手法で訳した。私は今度林少華と違ってはつきりと、簡潔的、割合に普通の大衆に接近する手法で訳すことである。

### 【添削後】

語義の解釈: 語義の解釈について言及するなら、林少華は割合に抽象的で生き生きとした言葉を使って、読者の読む気分を高めるという手法で訳しているという評価を下すことができる。しかしながら、本稿では林少華とは違って、はつきりと簡潔な表現を目指し、一般大衆にも十分に通用する手法で訳すことである。

続いて、もう1例、参考までにN2で修士論文を執筆した学生による論文を列挙する。この学生はジャーナリストになりたいという明確な志望を持っており、論文もニュース報道に関する内容でまとめた〔注27〕。

### 【添削前】

若者グループに身近なニュースは、エンターテインメントのなか、自分好きなスター、流行している服、ゴシップニュース、及び新しい科学、新技術など、その共通点は好奇心である。

### 【添削後】

若者グループに身近なニュースは、エンターテインメントの中にあることが多く、自分の好きなスター、流行している服、ゴシップニュース、及び新しい科学、新技術などに対しては好奇心を持つものである。

こうしてみると、かなりの修正が必要であることが分かってくる。

## 10. ベトナム人学生の気づき

『心』のベトナム語訳は1971年に初版がドー・カン・ホァンとグエン・ツォン・ミンによる共訳の形で南部のソントウ出版社 (Nhà xuất bản Sông Thao) から出された。その後30年の時を経て、2011年にハノイの文学界出版社から同じ翻訳が再版されている〔注28〕。

まずは、N2の学生による指摘に着目してみよう〔注29〕。例えば、「私を驚ろかせたハンケチ付の古い麦藁帽子が自然と閑却されるやうになつた。」(41章/中5)に相当するベトナム語の箇所を和訳すると、「父が初めて被る時に私を驚かせた洗顔タオルが後ろ側に結ばれた麦藁帽子が今家の隅に閑却されるやうになつた。」となるとのことである。以下、この学生による論文につき、授業者による添削前と添削後での異なり方を示してみる。

## 【添削前】

この場合は抜けるところもあるし、過剰部分をつけるところも所々ある。だが、一番大きなミスとしては意味変化である。それは「ハンケチ」は「洗顔タオル」になるということである。こうすると、読み手を誤解させ、全く違うイメージにつながるということになってしまう可能性がある。

## 【添削後】

この場合は意味が抜けているところもあるし、過剰な部分をつけているところもある。だが、一番大きな問題は選択された名詞に関するものである。「ハンケチ」は「洗顔タオル」と訳されている。こうなると、読み手を誤解させ、全く違うイメージにつながる可能性がある。

## 【添削前】

また、もう一つの大きなミスは原文の日本語はベトナム語に全然訳されなかったというのである。代表的な例としては「さうして愈と極めた日はそれから又一週間の余も先になつてゐた。」という原文のことである。訳されないと、筆者の言いたいことは確実に読者に伝えられない。翻訳者からすると、できるだけ著者の意図を表現できれば、良いのではないだろうか。つまり、本章は主に意味変化と翻訳なしという誤りが一番多いのである。

## 【添削後】

また、他に見逃せない問題は原文の日本語の一部がベトナム語に全然訳されなかった箇所を指摘できる点である。代表的な例としては「さうして愈と極めた日はそれから又一週間の余も先になつてゐた。」という原文である。ここが訳されないと、筆者の言いたいことは確実に読者に伝えられない。つまり、意味変化と翻訳されないまま放置されたという問題は無視できない。

その他に、この学生の語彙に関する気づきとしては、「又遠くから相当の医者」(41章／中5)という箇所の「遠くから」が訳されていない、「私を理解しない」(同)のベトナム語訳は「私のお腹を理解しない」という意味もあるため、誤解を招きやすい、「教育を受けた」(43章／中7)が「教育を吸収した」と訳されている、「遠国」(同)は「家から離れた他の県」となっている、などがあつた。

ちなみに、N2の他の学生〔注30〕からは、ベトナム語の翻訳者は英訳〔注31〕を参照していたのではないかという指摘があつたことも付け加えておきたい。

続いて、N1取得者で日本に3年間在住した経験を持つ学生による指摘に注目してみよう〔注32〕。

受け手が分かり難いと判断したため挿入したか、翻訳者の能力不足のため回りくどい表現になったなどの理由で、原文にはない要素が追加される場合がある。

原文：「少し午眠でもおしよ」

訳文：「Sao con không chợp mắt ngủ trưa một lúc để lấy sức đi [直訳「力を取り戻すため少しでも

眼を閉じ、昼寝すれば]]”。

この場合、「力を取り戻すため」、「でも眼を閉じ」という要素は原文にはなかったが、目標言語において過剰追加されたものである。

続いて、もう1つの例を見てみよう〔注33〕。

原文：「もう少し様子を見てからにしませうか」

訳文：“Có lẽ con sẽ nán nã ở lại nhà cho đến khi nào mọi việc được rõ ràng hơn chút nữa.? [私は多分全てのことがはっきりするまでは、もう少し家に居座った方が良いでしょう。]”

この場面、原文を分析すると「もうちょっと様子を見るため、『少し家に居座った方が良い』』という背景の意味が解釈されるが、どうしてもそこまで言わないと意味が通じないときだけに説明の追加を止めるべきではないかと考える。この例は、原文のまま、“Để xem tình hình thế nào đã mẹ nhi? [直訳、「事情がどうなるか見てからにしましょうかね、お母さん!』』”と言えば通じるだろう。

また、日本の地名である「東京」や「鎌倉」それに人名の「作さん」、「静さん」、「御光」などの固有名詞をベトナム語に訳すとき、それらの漢越音を利用して訳すと、ベトナム人には分かりやすいが、「日本独自の文化的背景を持った語彙」だという事実は隠蔽されてしまう。よって、『心』の翻訳者は漢越音を利用せず、ラテン表示で借用の形を取り、以下のようにそれぞれを訳したのである〔注34〕。

「東京」→“Tokyo”

「鎌倉」→“Kamakura”

「作さん」→“*chú* Saku”

「静さん」→“*cô* Shizu”

「御光」→“Omitsu”

なお、他のN1取得の学生（現職教員）も、やはり様々に問題を見出し、一部ではあったが再翻訳を試みたことを付け加えておきたい〔注35〕。

## 11. 本研究の限界

以上、見てきたように、外国人学生に日本近代文学作品を原文と留学生の母語訳とを対照させ問題点を指摘させる授業を通して、学生たちが言語文化比較研究の視点に目覚めていった様子を略述してみた。しかしながら、本研究には限界（limitation）も当然ながら存在する。筆者は日本語のネイティブ・スピーカーという立場に立った日本語教師であるため〔注36〕、世界各国から集う留学生の母語に関する知識が乏しい。理想を言えば、日本語と留学生の母語双方に通じた比較言語文化研究者による実践が望ましいのは言うまでもないことであろう。留学生による分析そのものが間違っているケースを精査しきれない場合もある点については、率直に認めなければならないであろう。

## 12. 結語

複数の言語文化に通じていると国際関係の安定化に寄与することは、今さらながら言うまでもない。今後、国境をこえた人々の往来が盛んになってくることを勘案すれば、グローバルという視点が相当に必要となってくることも間違いのないところである。そのように見れば、文化交渉の現場として翻訳や外国語学習を位置付ける必要性がある訳である。私たちには、誰にでも異なるものを見たいという欲求が存在する。日本語能力獲得者はアジア諸国に偏在すると考えて差し支えないであろう。そのような人材を育てることは、教育現場を預かる立場の者に課せられた使命であるといえる。

留学生教育は、重要な外交問題の一翼を担う仕事である。留学生の能力を指導教員の杓子定規なものさしで判断してしまうのではなく、教員と学生が意をひとつにして取り組みれば、未踏の研究領域に分け入っていくことも可能なはずである。グローバル化の進行は英語さえ学べばよいという風潮を巻き起こしやすい。しかしながら、日本言語文化に関する論文を日本語で執筆し、残していこうとする学生は、将来の国際関係を占う貴重な人材であると言えるのである。

## 注

- 1 「日本語力+ $\alpha$ 」の概念は、邱（2010）、及び、松永・緒方・余（2015）によっている。
- 2 「日本事情」とは、極めて広い分野を内包する概念であるが、ひとまずは、水谷・佐々木・細川・池田（1995）が扱う領域と定義し得るものである。
- 3 李（2013）、李（2014）がこの問題を扱っている。
- 4 それらの学生に対する指導の在り方を考究した研究として、山本・二通（2015）がある。
- 5 福岡工業大学大学院社会環境学研究所社会環境学専攻修士課程（2007年4月設置）に提出された留学生の論文テーマを参考までに列挙したい。修了生の大半を占めるのは中国からの留学生だが、2009年から2015年までの7年間に提出された論文題目は以下のものであった。純粋に日本研究に取り組んだと判断される論文は2013年に提出された「地方自治体による協定を用いたレジ袋削減策の動向と課題」1件のみであり、その他は中国研究、または日中比較研究を目指す内容が扱われていることが分かった。

2009年

「中国における企業の環境経営の研究と提言」

「中国における環境マネジメント・システム——地方政府の事例を中心に——」

「中国における「退耕還林」政策中止に関する問題と今後の展望」

「中国における環境会計の研究」

2010年

「中国の携帯電話産業」

「中国の経済発展に伴う日中貿易の構造的変化の研究」

「ドイツ・日本・中国におけるエネルギー政策に関する研究——再生可能エネルギー政策を中心に——」

「中国ホルチン沙地における砂漠化及び農牧業の現状と課題」

「環境ビジネスの市場拡大と中国の課題」

「急拡大する中国の自動車産業の動向と将来の方向」

「中国における経済発展と産業構造の転換——中部地域を中心に——」

「持続的経済発展を模索する大連」

2011年

「企業における環境報告書に関する研究——日本及び中国の家電メーカーの事例を中心として——」

「中国における直接投資の動向と問題」

「ホルチン沙地における生態経済モデルに関する研究」

「日本と中国におけるマテリアル・フローコスト会計の動向」

2012年

「中国河北省における農業用水と“一提一補”制度」

「中国内モンゴルオールドス市の都市化と飛砂防止について」

「中国水汚染防止法の規定に内在する問題——日本の水質濁汚防止法と比較しての研究——」

2013年

「日中の廃棄物問題に関する比較研究——福岡市と廈門市における廃棄物の処理状況を中心に——」

「マテリアルフローコスト会計の理論と事例研究——中国における建設業を中心に——」

「地方自治体による協定を用いたレジ袋削減策の動向と課題」(本論文のみ日本研究)

「中国家電産業の発展——ハイアールを中心に——」

2014年

「身近なニュースの重要性——ジャーナリストの取材活動に対する提言——」

「中国人日本語学習者にありがちな問題点」

「中国新疆における水資源のマテリアルフローコスト会計導入の可能性——理論と事例研究——」

「夏目漱石『心』中国語訳の研究——林少華訳の評価をめぐって——」

2015年

「夏目漱石『心』中国語訳の研究——1982年版から2013年版までを手掛かりとして——」

「日本と中国における企業の社会的責任の比較研究——サッポログループと青島ビール的事例を中心に——」

また、上記以外の修士論文としては、台湾からの学生が取り組んだ「日本と台湾のエネルギー政策に関する比較研究」(2014年)、日本人学生が取り組んだ「レジ袋削減方策」(2009)、「ダム上流にある産業廃棄物処分場の問題——解決に向けた市民運動——」(2010)、「地方自治体における森林整備等によるCO2削減の認証制度について」(2011)、「太陽光発電普及の要因分析と政策評価」(2014年)がある。

以上を総括すると、同専攻は環境問題を中心とした人文社会科学研究を主として中国人留学生が日本語で学び、日本語で発信する形で発展してきたと言える。

6 水内・李(2006)がこの問題に挑んでいる。

- 7 徳永 (2008b)
- 8 財団法人日本国際教育支援協会ホームページからの引用であるが、現在考えられている「日本語教育学」の領域を知るためには、日本語教育学会 (2005) や近藤・小森 (2012) を参照することが望ましい。
- 9 徳永 (1997)、徳永 (2015a)、徳永 (2015b) などでの実践を留学生にも体験させることにしたのである。
- 10 夏目 (1994c)
- 11 夏目 (1994d)
- 12 夏目 (1994a)
- 13 夏目 (1994b)
- 14 Natsume, McKinney (2010), Natsume, Field (1978)
- 15 夏目・서 (1990)
- 16 夏目・林 (2000)、夏目・林 (2012)、夏目・呉 (2012)、夏目・傅 (2009)、夏目・呉 (2010)
- 17 夏目・陳 (2000)
- 18 Sôseki Natsume, Đỗ Khánh Hoàn và Nguyễn Tường Minh (2011)
- 19 徳永 (2013)
- 20 韓国は櫻坂 (2007)、河先 (2013)、中国は皮 (2002)、李 (2006)、鮑 (2011)、田中 (2013)、台湾は蔡 (2003)、ベトナムは宮原 (2014) に詳しい。
- 21 翻訳論への発展を期するならば、鳥飼 (2013) の参照が欠かせない。
- 22 換言すれば、本実践は、ガブラコヴァ (2009) の「翻訳の利用をどのように捉え、教授法的に正当化できるかということと、そしていかに文学教育全体の知的、倫理的、美的刺激を維持できるかということ」(177頁) に挑んだ報告になる。
- 23 夏目・林 (2000)
- 24 夏目・林 (2012)
- 25 徳永・李 (2014) 152~155頁
- 26 李 (2014) 6頁
- 27 徳永・黄 (2014) 72頁
- 28 注17に同じ
- 29 徳永・チャン (2014) 103頁
- 30 徳永・トゥ (2014)
- 31 Natsume, McClellan (1957)
- 32 マイン・徳永 (2014) 162~163頁
- 33 同上 163~164頁
- 34 同上 164~165頁
- 35 徳永・クオン (2014)
- 36 平林 (2014) が展開する議論に目を向ける必要がある。

## 参考文献一覧

- 櫻坂英子編著 (2007) 『韓国における日本語教育』 三元社
- デンニツァ・ガブラコヴァ (2009) 「多文化主義時代における日本近代文学」、萬美保・村上史展編 (2009) 『グローバル化社会の日本語教育と日本文化——日本語教育スタンダードと多文化共生リテラシー——』 ひつじ書房
- 河先敏子 (2013) 『韓国における日本語教育必要論の史的展開』 ひつじ書房
- 近藤安月子・小森和子編 (2012) 『研究社 日本語教育事典』 研究社
- 蔡茂豊 (2003) 『台湾日本語教育の史的研究 上・下』 大新書局
- 田中祐輔 (2013) 「中国の大学専攻日本語教科書の現代史——国語志向と文学思想——」、*「言語文化教育研究」* 第11巻 早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会
- 邱英金 (2010) 「「+α」の時代を迎える日本語教育——台湾の現場から——」、トムソン木下千尋・牧野成一編 (2010) 『日本語教育学研究2 日本語教育と日本研究の連携——内容重視型外国語教育に向けて——』 ココ出版
- 徳永光展 (1997) 「ドイツ語訳『坊っちゃん』考——*Der Tor aus Tokio*を読む——」、*「比較文学」* 第39巻 日本比較文学会
- 徳永光展 (2008a) 「中国人大学院生に対する日本語論文執筆支援の実践——社会環境学専攻学生を例として——」、*「商経論叢」* 第49巻第1号 九州産業大学商学会
- 徳永光展 (2008b) 「日本語教育能力検定試験出題傾向の変遷」、チャン・ティエ・チュン・トアン編 (2008) 『ハノイ大学日本語教育開始35周年国際シンポジウム——日本語教育を踏まえた日本研究への道——論文集』 世界出版社 (ハノイ)
- 徳永光展 (2013) 「ベトナムにおける日本文学教育の実践——ハノイ大学大学院を例として——」、*「東アジア文化交渉学会第五屆年會論文集 上冊」* 東アジア文化交渉学会
- 徳永光展 (2015a) 「日英翻訳における時制の処理——夏目漱石『心』のMeredith McKinneyによる英訳を例として——」、*「タイ国日本研究国際シンポジウム2014 論文報告書」* チュラーロンコーン大学文学部東洋言語文化学科日本語講座
- 徳永光展 (2015b) 「夏目漱石『心』英訳にみる日本文化翻訳上の問題点——Meredith McKinney訳を手がかりに——」、*The electronic proceedings of the 4th International Conference of the Japanese Studies Association in Southeast Asia* edited by the Institute of East Asian Studies, Thammasat University.
- 徳永光展・黄璐 (2014) 「ジャーナリストに求められる資質——ニーズを見極める力——」、*「社会環境学」* 第3巻第1号 社会環境学会
- 徳永光展・グエン・クオン (2014) 「夏目漱石『心』「中 両親と私 14~15」ベトナム語改訳の試み」*「社会環境学」* 第3巻第1号 社会環境学会
- 徳永光展・ホ・ティ・タン・トゥ (2014) 「夏目漱石『心』「中 両親と私 1~4」ベトナム語改訳の試み」*「社会環境学」* 第3巻第1号 社会環境学会
- 徳永光展・李曉東 (2014) 「夏目漱石『心』中国語訳の考察——林少華訳の評価をめぐって——」、*「社会環境学」* 第3巻第1号 社会環境学会
- 徳永光展・グエン・ティエ・トゥ・チャン (2014) 「日越翻訳の問題点——夏目漱石『心』「中

- 両親と私 5~8」を例として——」、「社会環境学」第3巻第1号 社会環境学会  
 徳永光展・李翹 (2013) 「日本語漢字単語とその中国語」、「社会環境学」第2巻第1号 社会環境学会  
 徳永光展・李翹 (2014) 「中国人日本語学習者が抱える問題点」、「社会環境学」第3巻第1号 社会環境学会  
 鳥飼玖美子編著 (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』 ミネルヴァ書房  
 夏目漱石 (1994a) 『漱石全集 第2巻』 岩波書店  
 夏目漱石 (1994b) 『漱石全集 第6巻』 岩波書店  
 夏目漱石 (1994c) 『漱石全集 第9巻』 岩波書店  
 夏目漱石 (1994d) 『漱石全集 第12巻』 岩波書店  
 夏目漱石, 傅羽弘翻译 (2009) 『少爷』 吉林大学出版社  
 夏目漱石, 林少华翻译 (2000) 『心』 花城出版社  
 夏目漱石, 林少华翻译 (2012) 『心』 青岛出版社  
 夏目漱石, 吴树文翻译 (2010) 『后来的事』 上海译文出版社  
 夏目漱石, 吴树文翻译 (2012) 『玻璃門内 (伦敦塔, 文鳥, 十夜夢, 玻璃門内)』 上海文艺出版社  
 夏目漱石, 陳寶蓮譯 (2000) 『心』 先覺出版股份有限公司  
 夏目漱石, 서석연 옮김 (1990) 『마음』 범우사  
 日本語教育学会編 (2005) 『新版 日本語教育事典』 大修館書店  
 皮細康 (2002) 「中国の大学における日本語専門教育」、水谷修・李徳奉編 (2002) 『総合的日本語教育を求めて』 国書刊行会  
 平林奈美 (2014) 『「ネイティブ」とよばれる日本語教師——海外で教える母語話者日本語教師の資質を問う——』 春風社  
 鮑頭陽 (2011) 「中国の主要大学日本語学部における日本語教科書の使用状況」、「朝日大学一般教育紀要」第37号 朝日大学  
 ブイ・フン・マイン、徳永光展 (2014) 「翻訳における質の批評——夏目漱石『心』のベトナム語訳版を例として——」、「総研大文化科学研究」第10号 総合研究大学院大学文化科学研究科  
 松永典子・緒方尚美・余銅基編 (2015) 『科学研究費補助金 基盤研究 (C) 課題番号2551105 中間報告書 (平成25年度~平成28年度) 「日本語+ $\alpha$ 」の人材養成と人文社会科学系研究との連携——日本型「知の技法」に学ぶテキスト作成に向けて——』九州大学大学院比較社会文化研究院「日本語教育・留学生教育における日本型『知の技法』の活用に関する研究」研究チーム  
 水内宏・李潤華 (2006) 「「日本事情」教育における新視点と教材開発」、「千葉大学教育学部研究紀要」第54集 千葉大学教育学部  
 水谷修・佐々木瑞枝・細川英雄・池田裕編 (1995) 『日本事情ハンドブック』大修館書店  
 山本富美子・二通信子 (2015) 「論文の引用・解釈構造——人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究——」、「日本語教育」第160号 日本語教育学会

宮原彬 (2014) 『ベトナムの日本語教育——歴史と実践——』本の泉社

李曉東 (2014) 「夏目漱石『心』中国語訳の研究——林少華訳の評価をめぐって——」福岡工業大学大学院社会環境学研究科修士論文

李若柏 (2006) 「中国における日本語教育の重要な課題——ハイレベルの日本語通訳人材の育成について——」、「広島大学留学生教育」第10号 広島大学留学生センター

Sôseki Natsume, *And Then* translated by Norma Moore Field, Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1978.

Sôseki Natsume, *Kokoro* translated by Edwin McClellan, Chikago: Henry Regnery Company, 1957.

Sôseki Natsume, *Kokoro* translated by Meredith McKinney, New York: Penguin Books, 2010.

Sôseki Natsume, *Nỗi lòng* dịch bởi Đỗ Khánh Hoàn và Nguyễn Tường Minh, Hà Nội, Nhà xuất bản Hội nhà văn, 2011.

### 【付記】

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C・課題番号25511005（平成25年度～平成28年度）「日本語教育・留学生教育における日本型「知の技法」の活用に関する研究」（研究代表者・松永典子、研究分担者・徳永光展、施光恒）に基づく研究成果の一部である。

（とくなが・みつひろ）